　　　　　　　　社会思想史学会第46回大会（2021年10月30日・31日）

　　　　　　自由論題報告（2021年10月24日～31日、社会思想史学会HP掲載）

司会：山田正行（東海大学）

　　「日常的認識と社会科学的認識との関係の再問」（田口雄一朗、埼玉医科大学等非常勤講師）

報告の概要

　本発表では、「社会科学の哲学」の立場から社会学の古典を見直す作業の一環として、A.シュッツの実践的著作「よそ者」「帰郷者」を瞥見し、その手法を彼の理論と照合した。その結果、彼の焦点は通常「意味学派」「主観主義的社会学」という言葉で想起されるような個人の生活世界よりも、異なる解釈図式の衝突とその理由を類型化することにあったとわかった。この類型化という手法をシュッツが採った理由については「明晰さ」「関連性」の議論を含めて進めていく必要がある。

質疑応答の概要

　１件質問をいただき、シュッツの言う「明晰さ」はそれ自体「類型化」であるように見えるが、それは「よそ者」「帰郷者」にみられる人物像の類型化とどのような相違があるのか（ないのか）、というものであった。それに対して、類型化としては同じだがシュッツや社会科学（の哲学）の観点からすれば重心の置き方が異なり、また絶対的な類型化などではなく、今後大いに改訂されるべきものであると回答した。